

会報 第25号

みなみあいづ

発行 令和7年10月1日
発行者 福島県公立学校退職校長会
南会津支部長 斎藤修一



「神楽鉢」

福島県公立学校退職校長会南会津支部

目 次

表紙 題字 故桑名完爾先生 写真 小林宗一先生

- 目次 (敬称略)
- ご挨拶 「県退職校長会会津大会の成果を今後に」
　　県公立学校退職校長会南会津支部長 齋藤 修一 p. 1
- 特別寄稿
　　雑感「南会津に来て」
　　県教育庁南会津教育事務所長 佐藤 智晃 p. 3
- 「最近のクルマ事情」
　　檜枝岐村教育委員会教育長 平野 好道 p. 5
- 「雑感～コミュニティの活性化のために～」
　　南会津郡小中学校長協議会長（田島小学校長） 栗木 孝直 p. 6
- 新会員より
　　「AI（人工知能）について、最近思うこと」 室井 正之 p. 8
- 「新会員の室井辰生です。『たっちゃん』と呼んでください。」 室井 辰生 p. 9
- 「お世話になります」 伊藤 知雄 p.10
- 支部会員から
　　「昔は…」 南会津町田島 星 賢二 p.11
- 「第三の人生を考えながらの日々」 只見町蒲生 馬場 永好 p.12
- 「幼稚園勤務 8 年間」 南会津町田部原 山本 恭士 p.13
- 「日常と非日常の充実」 下郷町中妻 高橋 弘之 p.14
- 「今できることを今やろう」 檜枝岐村滝沢 橘 成美 p.15
- 県大会を終えて 大会実行委員会総務 星 裕次郎 p.16
- 事務局より
 - ◇ 栄えある受賞 祝賀寿 室井 強 先生 p.19
 - ◇ お悔やみ、総会、研修会だより p.20
- 表紙に込めて
　　編集後記 小林 宗一 p.22

ご挨拶

県退職校長会会津大会の成果を今後に

南会津支部長 齋藤修一

南会津の若葉が新緑に変わる6月10日に天氣にも恵まれ、会津四方部の会員各位のご支援のもと、南会津支部主管の会津大会が無事終了できましたことに改めて御礼申し上げます。

「前例踏襲は、仕事ではない」「改革は、笑われることから始まる」という私の生意気な生き方考え方で多くの方々にご迷惑をおかけしましたが、「南会津の意地を示したい」という気持ちも正直ありました。そこでこの大会のレガシー創出に挑戦して参りました。



会津大会実行委員長あいさつ

【小林宗一氏撮影】

先ず、第一は、「大会にテーマを設定する」ことです。何のためにこの大会を開催するのかという原点を問うこと無しに、意味のある大会は実現できないと考えます。そこでテーマを「共生と持続可能な社会の実現に向けて貢献するために」と掲げました。これによって大会の運営や内容の目指す方向性が決定し、退職校長会の存在意義を再点検する機会になってほしいと願ったのです。

終わってから「主旨が一貫した大会でよかった」というお話をもいただきましたが、やはり初めての試みでもあり、運営や内容面で詰め切れていない部分が多くあったと考えております。

第二は、「日本の教育を自己完結型から貢献型に転換する」その契機としたい。講演者のねっか代表脇坂斉弘さんは、その貢献型教育のゴールの具体的姿である。仕事のない只見で地元の素材を活かして新しい産業を興して只見で生き抜く。これからの教育はこうした地域で生き抜く人材を育成し持続可能な地域を創造していくようにすることが求められる。これこそ本当の地方創生であるという思いで講演者を決定しました。

当日は、「話は分かりやすくテーマと一致している」との声もいただくとともに、米焼酎ねっかロビー販売も好調で、途中商品が不足してしまい、代表が慌てて町内の酒販売店から商品を回収してくる等うれしい場面もありました。

しかし、大きな教育の転換期にあること、換言すれば「自分で学んだことを活かして、人様や地域（社会）のために、自分にできる行動を起こしていく人材（社

会変革力)を育成する教育の時代になっている」という認識までは深まらなかつたと考えています。退職校長会としてこの認識に立てなければ時代にあった学校支援は難しいと思います。

第三は、「退職校長会という組織も地球市民という意識を醸成する」その契機としたい。環境負荷低減を具体的に生み出す行動を、組織として推進していきたい。具体的には、運営に使用する各種表示等の紙の削減、プラ弁当のゴミの圧縮に取り組みました。日本では、こうした環境への意識は個人レベルでは取り組みが進んでいるのに、シビックアクションの強い欧米と比べ、組織としては極めて弱いという現状を打破したいと考えたのです。

しかし、この取り組みへの理解はなかなか難しく、アンケートでも不十分さを指摘されました。今後は、大会要項やアンケートを紙ではなく、QRコードで対応するような時代を迎えてほしいと思っています。地球規模の課題は、誰かが解決してくれる遠くの課題と考えられがちですが、よくよく考えて見ると地球規模の課題は、私たちの日々の生活から起因しており、極めて日常的な身近な問題なのです。

第四は、「大会宣言を内(自己)なるものから外(社会)に力強く発信するものにする」その契機としたい。この組織に入り、初めてこの宣言が内(自己)なるものと聞いたときは正直驚きました。大会宣言は、組織としての社会的覚悟を示し、会員の自己の生き方を示唆するものであってほしいと願っていました。そのため従来の宣言内容を、文言構成の要素、性格、宣言方法、宣言の実践化、マスコミ対応等の5視点で精査し原案を作成し、県本部の指導を仰ぎ当日を迎えました。

反省には、「起立唱和での宣言は良かった」との声も多くあり高評価であったとは思いますが、まだまだ大きな課題があります。それは、「宣言して終わり」となることです。この宣言が、県及び各支部の組織の活動計画と連動し、きちんと評価が行われないと全く意味がありません。また、各自の考え方生き方に具現化し、生活において具体的に行動するという、いわば「自分事化」しなければ、宣言は「絵に描いた餅」そのものとなってしまいます。

長々と大会の総括を記してしまいましたが、最後に改めて庶務の星裕次郎さんの熱意と実行力を中心に、南会津支部会員皆様方の絶大なお力添えで県大会という大行事が、「南会津支部の力」を示しながら、滞りなく終了できましたことに感謝申し上げます。

本当に本当にありがとうございました！！！！！



雑感「南会津に来て」

南会津教育事務所長 佐藤 智晃

南会津に来て春と夏を味わった。雪まだ残る早春の景色、一斉に芽吹く新緑の景色、圧倒的な迫力の深緑の山々。どれも素晴らしい自然を体感することができた。そして、食べ物もおいしいしお酒もおいしい。これまで日本酒を飲んだ翌日の頭痛と不快感が体に染みついていて、あまり得意ではないのだが、今回の赴任で、懇親会、歓迎会などでしたま飲んだ翌日に不快感がなかった。楽しく飲めたり、とてもおいしい南会津のお酒が好きになった。



また、人がいい。会津に赴任すると「会津三泣き」を体験するといわれるが、最初の「泣き」はまだ体験していない。いろいろなところにご挨拶させていただき、多くの方々とお話しする機会があるが、どこに行っても Welcome で迎え入れてもらった。本当にありがとうございましたし、安心して生活することができている。初任地は喜多方なので2度目の会津ではあるが、南会津の人々の人情厚い人間性はどのように育まれてきたのか、そのアイデンティティーの源流が知りたくなった。

先日の御蔵入交流館で開催された福島県公立学校退職校長会会津大会において、実行委員長の齋藤修一先生が、あいさつの中で「御蔵入」について話してくださいました。「御蔵入」とはこの南会津が幕府直轄領だったことからその呼び名が残っていることを聞き、どのような意味や経緯があったのか興味を持った。インターネットで調べると、「お蔵入り」はよく出てくるが「御蔵入」はあまりヒットしない。今はインターネット検索エンジンも AI が導入されており、こちらの意図を検索語として少し増やして入れると、少しづつヒットしてきた。

「御蔵入」の歴史的な経緯を知ると、より詳しく調べてみようと思った。

南会津教育事務所の所長室には、各町史、村史が蔵書されている。

まず田島町史から読んでみる。

<「御蔵入とは？」 AIによる検索結果>

「御蔵入」は、いくつかの意味を持つ言葉です。主に、計画されていたものが中止・取り止めとなり、世に出ることがなくなる状況を指す「お蔵入り」という言葉の語源として知られています。また、江戸時代には、将軍や大名の直轄地を指す言葉としても使われていました。

●「御蔵入」の歴史的な意味

江戸時代には、将軍や大名の領地は、家臣に分け与える「給地」と、直轄地である「御蔵入地」に分かれていきました。御蔵入地は、幕府や藩が直接支配する土地で、年貢などの収入は、幕府や藩の財政を支える重要な役割を果していました。

例えば、会津藩の南部は、幕府の直轄地である「南山御蔵入領」として、代官が統治していました。この地域では、年貢の負担が重く、農民の不満が高まり、一揆が起こったこともあります。

南山御蔵入領の成立は、若松城に保科正之が入部した寛永 20 年(1643)に幕府が収公した会津郡・大沼郡・岩瀬郡・下野国塩谷郡の 5 万 1200 石を預かった。このうち岩瀬郡を

〔特別寄稿〕

除いた分を南山御蔵入と称されたとある。1石がおよそ 150 kgだから 51,200 石は 7,680t と計算される。令和4年産作物統計によると南会津の米の収穫量はおよそ 8,500t となるが、生産性は現在のほうが高いと思われる所以、より広い作付面積があったのではないか・・・などといろいろと想像がめぐる。

その後5回の預かり支配と幕府の直支配を繰り返すなど、当時の政治情勢の変化や不安定さを感じ取られる。180 年以上の預かり支配と 50 年に満たない直支配を考えると、会津藩の統治はうまくいっていたということだろうか。また、「郷」や「組」、「村」などの行政区がありそれぞれの地名として残っていることも興味深い。

AI の検索結果にもある通り、一揆についても読み進めると「南山御蔵入騒動」として記録がある。また AI に「南山御蔵入騒動とは？」と聞いてみた。

<「南山御蔵入騒動とは？」 AI による検索結果>

南山御蔵入騒動とは、江戸時代中期、陸奥国会津地方の南山御蔵入領（現在の福島県南会津郡など）で起きた百姓一揆のことです。享保年間（1716年-1736年）に、年貢の増徴や米納の強制など、幕府による厳しい支配に苦しんだ農民たちが、年貢の軽減や郷頭制の廃止などを求めて蜂起しました。

背景：1713年（正徳3年）に会津藩預かり支配から幕府直轄地（御蔵入領）となった南山御蔵入領では、年貢の取り立てが厳しくなり、農民の生活は困窮していました。

経緯：1720年（享保5年）10月、南会津郡の農民約700～800人が、田島代官所（現在の南会津町）に押し寄せ、年貢減免や郷頭の廃止などを要求しました。

要求内容：主な要求は、年貢の軽減、年貢の金納から米納への変更、郷頭の廃止などでした。

結果：幕府は一部要求を受け入れ、江戸廻米を中止しましたが、一揆側の首謀者や一部農民は処罰されました。

影響：南山御蔵入騒動は、幕府領における最初の強訴であり、幕府に大きな衝撃を与えた。

AI はとても便利だ。効率的に要約してくれる。ただし内容の真偽は保証されていない。

教育行政に携わり 10 年ぐらいになるが、職業病だろうか、それとも数学教師の性なのか？年号や数値が出てくると、どうしても確認したくなる。また町史や村史で確認すると、当時の人口規模や国の石高、年貢の接收方法、当時の将軍や藩主の政治手法などが分かってきた。また、合併わきの丸山公園には「南山義民之碑」があることや、騒動に関わった人、内容が詳細に記録されていた。直訴の訴状の内容から当時の生活や困窮の様子がうかがい知ることができる。



改めて、歴史的事実は人の営みの積み重ねであること。そして一人一人の思いが行動になった結果であること。「思い」が歴史を作っていくこと。いろいろなことを考えさせられた。

学生時代は学校で学ぶ歴史には全く興味はなかったが、南会津に来て、訪れた場所の歴史が気になるようになった。

歴史と伝統の南会津。まだまだ南会津ライフを楽しめそうだ。



最近のクルマ事情

檜枝岐村教育委員会教育長 平野 好道

近ごろの車は電動化や自動運転技術などが進み、大きく進化しているが、それに伴い車両価格も上昇している。また、連日のように逆走や衝突などの事故映像がニュースで流れているが、これはドライブレコーダーの普及も影響していると思う。

この間、点検整備中の代車がたまたま新型の電気自動車だったが、基本的な運転操作以外の操作方法がほとんどわからなかつた。満充電に近い状態であったため、走行可能距離が600km以上は表示されていたように記憶しているが、代車を借りている間は充電する機会もなかつたため、充電の仕方もわからないままだつた。当然だがエンジンを始動して走り出しても車内にはエンジン音もなく、その振動もない。運転操作以外は一般的なタブレットよりも大きな画面のタッチパネルやハンドル両脇のスイッチで操作するのだが、スイッチ自体もドラッグで操作するものもあり、慣れるまでには相当な時間がかかりそうであった。まるで車と会話するような感覚で話しかければ各種機能を操作することもできるが、同乗者がいなくても車に話しかけるのは何か恥ずかしいような感じがした。発音が悪いせいか、言い方が悪いせいか、車から聞き直されると話しかけにくくなってしまう。車内で同乗者と会話していると、発した言葉を操作の指示と解釈して何かが動き出してしまうことが度々あった。携帯電話を経由せずにアプリに対応していることで様々な機能を利用できたり、携帯電話を使って車両の鍵の開け閉めやエンジンを始動したりすることもできるようである。慣れれば徐々に操作を覚えられるのかもしれないが、最近の進化した車を購入したとしても覚えられずに終わることが相当多くなりそうだ。不明な操作方法は、紙の取扱説明書を読めば、ほぼ理解できるアナログな車にどうしても愛着を感じてしまう。

少子高齢化や若者の車離れ、半導体不足による生産調整などにより、車の販売・生産台数が減少していることから、受注がストップしたり、納期が1年以上かかる車種もあり、軽自動車でも一昔前の登録車を買うよりも高くなつたと感じる昨今、車を購入するにも一筋縄ではいかない。

公共交通機関が少ないこの地域で車は生活必需品である。豪雪地帯であるため、雪道の走行性能が高い4WDを選ぶことが多くなり、冬季はスタッドレスタイヤの装着も必要となる。寒冷地仕様がある車種はそれを選ぶことで安心感が増す。最近は改善されているようだが、2WDと比べると4WDは燃費が悪い傾向にある。地域の燃料格差による維持費を含め、必要な装備などを揃えていけばますます高いものとなってしまうため、このような地域で車を利用する生活に何らかの恩恵が受けられるようになることを密かに期待しているが、そのようなことも現実的になさそうである。

これからもどのように車が進化を続けていくのか先は見えないが、事故なく安全に、できる限り時代に取り残されないよう田舎でのカーライフを送っていきたい。

「雑感～コミュニティの活性化のために～」

南会津郡小中学校長協議会長（南会津町立田島小学校）栗木 孝直



新型コロナウイルスが猛威をふるい、正常な教育活動ができない状況が数年続きました。コロナウイルスが5類に移行し、徐々にかつての教育活動が戻ってきています。

コロナ禍にあっては、他者との接触を極力無くす生活を強いられました。他者とのコミュニケーションを絶たれた環境でした。コミュニケーションは、コミュニティの土台となるものです。コロナ禍にあっては、学校という子供たちにとってのコミュニティを成立させるコミュニケーションが不足していました。

現在、学校教育現場では「チーム〇〇」を掲げ、組織的に取り組むことで、諸課題への対応が求められ、「社会に開かれた教育課程（教育活動）」として、より広い視野に立って子供たちの教育活動の充実が叫ばれています。学校というコミュニティを組織的に機能させるためにはやはりコミュニケーションが必要です。

一方、コロナ禍を経て、保護者のコミュニティの一つであるPTAは、「不要論」が出され、活動に消極的な保護者が多くなり、他県ではPTA解散もニュースとして聞きます。これはPTAというコミュニティを存在させるコミュニケーションが不足していたことも一因であるように感じます。

余談になりますが、この8年間田島へ通う長距離運転の際など、一人になったときにいろいろと考えました。その一つが、このPTAへの参加への消極性についてでした。この消極性に日本独自の個人主義があるのではないかと。戦後、欧米の個人主義をもとに日本も個人の権利等を掲げ、民主的な方向性は、戦前の日本より確かによくなっていると思います。しかし、欧米の個人主義との違いを考えていくことも必要ではないかと思います。欧米は個人の権利を主張し行動しますが、最終的には「神」の存在があると思います。「最後の審判」ではありませんが、個々の思想、行動は神によって裁かれること、これが歯止めとはなっていないでしょうか。（「神」の存在をより厳格に捉えているのが「中東の神」のように思います。「神のために現世は尽くし、来世での幸せを望む。」この神の存在が自分の生命を擲つことも厭わない行為行動に出てくるのではないかと。）※類型は個人的なもので、絶対的なものではありません。

日本人にはあまりこの「神」の存在を感じません。日本にあってはこの神の存在が、「家」であったように思います。（「神」より、「仏様」に手を合わせる日本人が多いのでは。）近年、離婚をした家庭が多く見られ、学校現場で様々な対応が求められます。かつては「家」同士のつながりなどが婚姻には欠かせないものでした。様々なケースがありますが、このことが

〔特別寄稿〕

離婚等のハードルをあげていたように思います。

家庭は子供にとって最小単位のコミュニティです。このコミュニティがしっかりとしたものであることが、教育においては重要です。そのためには、先の日本的な個人主義はさておき、まずはしっかりとコミュニケーションをとることが大切であると考えます。では、何をもとにコミュニケーションをとるのか。このことを意識して本年度「学校教育」と「家庭教育」の立場で様々な教育内容を見直し、保護者の方に考えていただいています。例えば「挨拶ができるようにしてほしい。」との要望があります。学校では集団生活における挨拶の意義や重要性について指導します。しかし、挨拶ができるように指導するのは家庭教育であると考えます。同じようなこととして、今課題となっているSNSトラブル。SNSでのトラブルの原因や適切な活用方法等は学校教育で行いますが、実際の友達間のトラブルは学校ではなく、家庭間で指導していただくことなどです。その他に昔からよく話題となっていた「自転車乗り」もあります。現在「むし歯予防」についての取組を学校教育と家庭教育の視点で見直すなど、課題を提起しています。（この見直しは、教師の働き方改革にもつながると考えます。）

同じように「不要論」が出ていたPTAを活性化するためには、コミュニケーションが大切になります。田島小学校父母と教師の会では、役員を中心に「子供たちのため」をゴールに据えて話し合いを持ち、多くの保護者の意識を高めていくよう様々な機会を設定し、前向きに取り組んでいます。このコロナで途絶えた取組を復活させるには大変なエネルギーが必要です。本会の役員の方々の熱意にいつも感謝しているところです。

PTAとしての活動として郡PTA連合会があり、今年度より事務局を田島小学校固定から方部のローテーションとしました。このことにより、県PTAとのつながり（コミュニケーション）において様々な情報や研修の機会を多くのPTAの方々に経験していただけるようになったこともPTAの活性化、特に郡PTAの活性化のためには効果的であったと考えます。

さて長々と記してきたが、本校のPTAを参考にしながら、校長会として組織を機能させた取組を考え、現在行っています。春の総会時に示しました「南会津のストロング・ポイント」を生かして、県内における南会津の存在理由（アイデンティティ）を示していくこうという取組です。この取組の成果をみるには複数年かかります。校長会においても「子供たちのため」を目標に、子供たちのまわりにあるたくさんのコミュニティの一つとして、より活性化していくようコミュニケーションをしっかりと持ち、取り組んでいきたいと思います。



[新会員より]



AI(人工知能)について、最近思うこと

室井 正之

定年退職年齢が引上げられました。昨年度から段階的に延びてきているので、昭和39年生まれの私は62歳が退職となります。先輩諸兄姉の皆様がいる本会で、活動させていただくのは、もう少しお時間をいただくようになると思います。

さて、ここ数年、仕事をしていて思うのは、AI(人工知能)が急速に浸透しているということです。一昨年、文科省から「生成AI利用の暫定的ガイドライン」が出されてから、急に学校現場で関わる機会が多くなったような気がします。

一昨年度、私は現職校長会会報「やまなみ」で、「AI校長」がいると「次から次と湧き出して来る学校教育の諸問題～予期せぬ突発的な事故・生徒指導・新しい教育施策に対して、多くの知識（法律・判例・実践）を踏まえ、より合理的に、より効果的に、より迅速に判断ができるのではないか？」と提案し、「でもAI校長は責任をとることはできない、責任をとるのは人間校長だ」という内容の文章を書きました。この頃は、まだまだAI(人工知能)なんて、発展途上の段階で、創造性ある人間を乗り越えることなど、できないだろうと思っていました。

ところが、この2年ばかりで、状況が大きく変わってしまいました。当たり前のように「主張作文や読書感想文ではAI(人工知能)の使用禁止」、「試しにAI(人工知能)で、保護者宛て通知文書を作つてみよう」等の会話が職員室で出てくるようになったのです。実際、AI(人工知能)に「『思いやり』をテーマに中学生向けの道徳授業の指導過程を考えて」と指示を出すと、それなりの授業案が出来てしまうのです。

確かにAI(人工知能)に相談をしたり、作成のオーダーをかけると、それが的確かどうかは分かりませんが、何となく最適そうな、それなりの答えを返してくれます。時には独創的、創造的な内容を提案してくれる時もあります。さらには質問者に対して同情をしたり、感謝する言葉を添えて返してくるのです。「たいへんですね」「ありがとうございます」「がんばってください」と。

今年になって驚いたのが、「AIカウンセリング」を利用している生徒が出てきたことです。分別がある大人ならまだしもと思うのですが、中学生が時々「AIカウンセリング」を利用して、がんばることができていると言うのです。

「AIカウンセリング」を私は受けたことはありません。ちょっと不安で取り掛かりにくいからです。でも、きっとAI(人工知能)に相談すると、肯定や承認の応答を巧みに使って、健全で前向きな気持ちにさせてくれるのでしょう。もしかしたら不安な気持ちや悲しい気持ちを乗り越えるスキルを教えてくれているかもしれません。

私たちは今、AI(人工知能)に励まれ・教えてもらう状況が起きつつあるのです。これから先、AI(人工知能)が、私たちに与える影響を考えるととんでもない時代がやってくるのだと思わざるを得ません。

はじめてナビ付の自動車を運転し、目的地に着いた時「お疲れさまでした」と言われて感動した私にとって、AI(人工知能)に励まれ、ほめられて過ごす時代は「なんとも怪しい」と思いながらも、反面それなりに楽しく過ごすことができるのではないかと期待しているところもあるのです。

[新会員より]

新会員の室井辰生です。「たっちゃん」と呼んでください。

前 南会津町立館岩中学校長 室井 辰生

館岩中学校の校長として3年間、楽しく充実した学校生活を送らせていただきました。在職中は、皆様より叱咤激励をいただきましたこと心より感謝申し上げます。

さて、私は3月の役職定年をもちまして退職を決意し、現在は福米沢の自宅で農業に取り組んでおります。慣れない農作業で大変さはありますが、農業を勉強しながら

自分で考え計画を立てて取り組む毎日は、新鮮で楽しい生活です。人を育てる仕事から野菜を育てる仕事へ大きく変わりましたが、どちらも自ら育つ力があることや適切に目をかけ・手をかけることが大切な面は変わりません。今のところ月の半分は、福米沢で農作業や剣道の稽古を行い、との半分は、新潟市東区のセカンドハウス等でゆっくり過ごしている状況です。また、給食がないので、昼食を食べないで1日2食にしていましたら、87kgあった体重が78kgになりました。肥満解消で健康には良かったかもしれません。自由な時間が多くつくれるので、家族と4月は秋田の温泉へ、5月は中国へ、6月は関西大阪万博へ、7月は海水浴に連日行くなど、今まで取り組めなかつたことを毎月実行に移しています。その他、区長より部落の会計を依頼されるなど新しい地域貢献にも取り組んでおります。長い学校生活から大きく変わった退職後の近況も報告させていただきました。

4月より南会津支部退職校長会の会合に参加させていただいておりますが、先輩方のお元気で生き生きとやる気に満ちた活動の様子を見聞きし、感心しております。特に、県退職校長会会津大会が御蔵入交流館で開催された6月は、齋藤支部長様を中心に、皆様一丸となって取り組む姿に感動しました。今回その一員として私も関わることができたことは、大変うれしかったです。今後とも私「たっちゃん」をどうぞよろしくお願ひいたします。



[新会員より]



お世話になります

南会津町立田島中学校 教諭 伊藤知雄

この3月まで只見町立只見中学校長を務めさせていただきました伊藤知雄と申します。この度、役職定年となり、福島県公立学校退職校長会南会津支部に入会させていただくこととなりました。諸先輩のお仲間に加えていただけることに対し、恐縮の念とともに大変光栄に思っています。

校長として日々を振り返ったとき、校長として学校経営に関して何ら変革的なことは成し得ず、日々の業務に追われるばかりで、何の実績も残せぬまま終わってしまったという思いが強くありました。しかし、「社会的共通資本である学校教育は定常的であるべき」、「社会的共通資本は急激に変化してはいけない」という内田樹という人の文章に出会い、私が何もできなかつたことは、むしろよかつたことではないかと思わされました。そもそも浅学菲才、軽佻浮薄の身で、校長としての資質に乏しく、身から鎧を出すばかりの私のような者が下手に動くとかえって大変なことになったかもしれません。とは言え、教育という尊い営みに関わる者として、児童・生徒たちの健やかな成長と学びの環境づくりのために、まさに微力ながらも携わることができたことにささやかな喜びを感じています。お世話になった方々にこの場を借りて改めて御礼申し上げる次第です。

4月からは田島中学校教諭として現場に立たせていただいております。教科を教えるのは本当に久しぶりであり、正直なところ、大きな不安を抱えたまま勤務初日を迎えるました。その不安が今をもって小さくなることはなく、むしろ大きくなっているというのが正直な思いです。時代の変化とともに、生徒たちの興味・関心、価値観、学びのスタイルも、かつてとは大きく異なっていることを実感させられています。生徒指導や授業の在り方は如何にあるべきか模索の日々が続いています。授業では「教科書を教えること」に終始している自分に落胆する日々です。生徒の満足感や理解の深まりを図るために、ICTの活用や主体的・対話的な学びの場づくりなど、今の教育に求められていることに改めて向き合い、学び直さなければならないという思いを強くしています。今後更に、教材研究を怠らず、生徒に寄り添い、生徒の実態に応じた柔軟な授業をつくっていかなければならぬと思っています。生徒指導、授業ともに決して派手なことはできませんが、一つ一つ丁寧に、誠実に向き合いながら、生徒たちの心に届く指導ができるよう力を尽くして参りたいと思います。

この度、退職校長会に入れていただいたことは、私にとって大きな励みであり、これから的人生における新たな学びの場としても、大変ありがたく思っています。先輩方が築いてこられた豊かな経験や知見に触れさせていただくことで、自分自身の視野も大きく広がるものと確信しています。教育の本質を改めて学び直す身としては、初心に戻った心境です。どうか諸先輩の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

結びに、皆様のご健勝をお祈り申し上げ、入会のご挨拶とさせていただきます。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

※引用は内田樹氏のブログ『内田樹の研究室』より

[支部会員より]

『昔は・・・』

南会津町田島 星 賢二



「なんか書いてよ」という電話をもらい「特になんにもしてないので無理だべ」と言ったのですが、「思い出の先輩や出来事でいいのでよろしく」と言われ断り切れず（担当のH先生と私とB先生は教頭昇任試験前、当時の教育事務所次長に呼び出され「おまえたち3人はちゃんと試験勉強しているように見えない。3人そろって落ちるようでは事務所の恥になる」といわれた仲ですので）書いている次第です。

退職校長会県大会大成功で良かったですね。久しぶりに会った新任教頭時代に一緒だったS先生と話している中で、当時の多くの校長先生は今のコンプライアンス的にはだいぶ危ないという話題になりました。『不適切にもほどがある！』というテレビ番組（けっこう好きで見てました）でもやっていましたが、「それが普通だったよ」ということはいくらでもありましたね。ただ、同年代の方々と話をすると、多くの方が「昔は良かった。昔の方が良かった」と言うんですよ。つらかったこともたくさんあったはずなんですがね。

昔の酒飲み会は全員出席があたりまえで、酒に弱い私は飲み会の何日も前からどう切り抜けるかを考えたものでした。「俺の酒が飲めないのか」という台詞には「はい、いただきます」が当たり前の時代でした。ばかみたいに騒いだり、普通に職員室で忘年会の準備をしたり、給食で残ったごはんをおにぎりにして味噌を付け焼いたのを「おてのこ食わっしえ」といって手渡され「うまいうまい」と食べたり、PTAの会議では灰皿を並べるのが準備の最初だったり。きりがないか。でも、なぜか「昔は良かった」という話になります。

いかにも昔の校長先生の話をひとつ。私が体育主任をしていた頃のG校長先生はなかなかでした。歓迎会もだんだん盛り上がった中盤の頃、手招きされ「あそこで飲んでる、KもYもWもまだ俺のところに酒をつぎにこない。どうなってるんだ」とにらみながら言われました。なんとかうまいことを言ってその場は収まりましたが、そんな思い出のあるG校長先生（正直言って私はそれほど嫌いじゃなかったかな）も他界されました。こんな今で言うパワハラ校長の下では楽しい思い出はないのかというとそういうことでもなくて、その頃一緒につとめていた仲間と昔話をすると、やっぱり「あの頃は楽しかった」という話になります。

あれも忘れたこれも忘れた、膝も痛い腰も痛い、という今日この頃ですが、今回の原稿を書くに当たり、いろいろな学校での思い出が懐かしくよみがえりました。『昔は・・・』

[支部会員より]

第三の人生を考えながらの日々

馬場 永好

先日は、退職校長会の県大会が御蔵入交流館で開催され、久し振りに懐かしい顔に再会できたり皆さんの元気な姿が拝見できて感無量の1日でした。ありがとうございました。

私の退職後の7年間は、春夏秋冬の自然を満喫しながら雪解けと共にフキノトウやコゴミは、頼まれた人や新採用でお世話になった猪苗代町の日本蕎麦屋へ段ボール箱で何度か送る。6月には、ワラビを生のまま(40~50kg)を採り地区の何人かのグループがまとまって郡山の業者に出す。結構な収入(時給5,000円位)になる。その後は魚(アカハラ)を投網で取り「いづし」を漬ける人達に配る、ちなみに私も今年は、昨年の半分の5kgを漬けました。秋にはキノコ(松茸、舞茸、しし茸のみ)採り知人に送る。喜んでもらえる顔を想像しながら取ったり送ったりします。その他にも草刈りや漁業協同組合のワカサギ事業、伐採作業の手伝いをしたりして過ごし、冬になるとJR只見駅のホームを除雪機で除雪をしながら時々熊・鹿・猪の解体を楽しんでいる内に、あっという間に7年が過ぎたように感じる。そして8年目の年に奥会津学習センターの話があり、久し振りに勤めをしてみようかと考えた。只見高校生の学生寮(山村留学生)で若い世代と接することによりボケ防止の一助になるのではないか。毎日、今日は何をして過ごそうかと考えている必要がなくなるのもいいものを感じた。そんなこんなで週5日勤務していますが、何時まで続くことやら。私の趣味の成果を写真で紹介します。

投網で魚を取り、いづしにしたり、串魚(正月の御用)



しし茸



イノシシの解体



[支部会員より]



「幼稚園勤務8年間」

田島カトリック暁の星幼稚園講師 山本恭士

退職して8年、その間「暁の星幼稚園」にお世話になっている。小学校畠の私にとって幼稚園は驚きの連続である。小学校1年生を「宇宙人」と呼ぶことがあるが、幼児はなんと呼べばいいのだろうか。こちらの意図をほとんど汲んでくれない子どもたちを歌や手遊び、紙芝居等で集中させる先生方の手法にいつも感心。お話もまた上手。このような幼児教育や保育所生活が小学校生活につながっているのを実感させられる毎日である。

私の仕事は朝のお迎え。元気よく挨拶ができる子もあればママの後ろに隠れて涙ぐむ子も。「ママが大好き。もっと一緒にいたい。」それが当たり前。そう思いながら鬼になってママから引き離し、先生方に引き渡す。玄関に一步入ればなんてことはない。涙も乾きけろっとする。これが幼児なんだなあ。朝の草むしりや落ち葉掃き、花の手入れなど環境整備にも時間を費やす。

毎週火曜日は「お話の時間」を担当。季節に関わる草花や昆虫、鳥の話。わずか15分の話に四苦八苦。イラストや写真、動画を取り入れたパワーポイントを活用して、「おい、こっち向いて！」必死に呼びかける。次回は何をテーマにするか、どんな問い合わせてどんな材料を提示するか、現職時代の教材研究より細案が必要で、アイディアから完成まで相当な時間がかかる。



水曜日は「自然探検」。鳴山城跡地で自然の宝物探し。花を摘んだり、虫取り網でチョウやトンボ、バッタ捕まえたりと走り回る。その活動が自然の美しさや不思議さに気づき、いつの間にか知識も獲得していく。給食が終わった後には「文字遊び」。よく見てまねをすることが目的。まねができたら、花丸をたくさんプレゼント。一斉の活動にも意欲的に取り組む子ども達である。



木曜日は「運動遊び」。ルールのあるゲームや用具を使って遊ぶ楽しさ伝えている。運動の中に紙飛行機飛ばしや竹とんぼ、ブーメランなどの遊びの要素も取り入れているが、この30分の内容を考えるのも相当な労力を要する。

毎日の仕事としては一对一の「絵本読み」。絵本と文字に興味を持つための時間。今年は『さる・るるる』からスタート。空いている時間は子どもたちの遊びの中にいる。幼児は毎日飽きずによく遊ぶ。廃材を利用した物作り、プレールームでの追いかっこやおままごと、園庭では鬼ごっこにブランコ、三輪車乗り、砂遊び等。こちらがくたくたになってしまう。午後は「子ども塾」や「和太鼓」の準備・指導も行っているので、8時に勤務スタートしあつという間に17時になる。

遊びや自然体験を通して集中力や創造力、観察力等が育まれる幼児教育の重要性に気づくことができた8年間。しかし、少子化の影響が幼児教育の多様性を狭めてしまうことを危惧している。

[支部会員より]



「日常と非日常の充実」

前南郷小学校長 高橋 弘之

以前にも増して、天気予報を真剣に見るようになった。晴耕雨読等という立派なものでは無いが、天気が良ければ新米農夫としてやることはたくさんある。退職の時に手に入れた中古のトラクターは、今となっては、愛車よりも乗る機会が多くなっている。家の周りの田んぼや畑を除草の目的で耕すことがほとんどだが、驚くほどのスピードで生えてくる雑草は、暇を持て余す必要が無いほど無心にさせてくれる。細かい文字が見えにくくなってきて、在職中は、A4サイズをA3サイズに拡大しながらたくさんの書類と悪戦苦闘していたが、今は、野菜の育て方の本を愛読書として拡大鏡と一緒に持ち歩いている。「子ども同様、野菜も愛情と手間をかければちゃんと育つ」と農業の先輩から教えられたものの、子ども同様、一朝一夕にはうまくいかない。昨シーズンは、里芋もさつまいもも葉っぱだけはやたら見事に育ったものの、肝心の芋の収穫は残念な結果だった。今年は、ナスやトマトといった夏野菜はうまく収穫できたが、じゃがいもは、虫の被害で例年の半分の収穫となつた。時間ができた愛情も手間も十分かけたつ



もりだが、自然相手の野菜作りの難しさを味わう結果となった。「来年は～」と思える自分の前向きなパワーは、おそらく、結果よりも生育過程のおもしろさといった、農業の魅力が与えてくれたものだと感じる。体を動かすことが当たり前の日常だった自分にとって、晴れた日にトラクターのハンドルを握ることは、何より楽しい時間であることは間違いない。

さて、自分にとっての非日常と言えば、神奈川県の逗子に住む孫達との時間である。自分自身も共働きだったため、仕事と子育ての両立のむずかしさは十分分かっている。幸い我が家は親との同居だったため、子育ての大変さをあまり味わっていない。祖父母の愛情をたっぷり浴びながら、親は無くても子は育つ状態だった。退職と同時に要請があれば、車を飛ばして逗子に向かう。正直、孫達との時間がこれほど楽しいものだと、味わってみて初めて実感している。男の子ということもあり、求めてくる遊びも、娘達の時とは全く違って、農作業より体力の消耗が激しい。それでも、責任がない分、心底楽しめる孫子守りは、心身共にリラックス・リフレッシュできる最高の時間である。

見わたす限りの緑（雑草）と戦い、土まみれの日常、
200kmも離れた洗練された海の見える街での非日常。
今の自分にとってどちらも大切でどちらもかけがえのない
ものである。時間が過ぎれば、自分を囲む状況も変わって
いくだろう。それでも、自分自身の日常と非日常を楽しんで過ごしていきたい。



<江ノ島にて>

[支部会員より]

今できることを今やろう！



橋 成 美

今年の5月に主人が長い長い任を解かれ退職することができた。そこで、我が家家のコンセプトは、「今できることを今やろう！」となった。正直言うと、今までゴルフや登山、そして仲間と飲み会など、やりたいこと、たっぷり楽しんではきたのだが。その一つの車中泊登山について紹介しよう。

今年の一学期(学校勤めの単位)は、3つの山に挑戦。「一切経山」「月山(毎年恒例でお参りついでに)」「秋田駒」に登頂することができた。特に「秋田駒」の美しさは素晴らしかった。今まで、木曽駒、早池峰山、鳥海山等も小さな高原の花々は可憐で美しかった。登りが苦手で、常に息が上がっている私にはこれ以上の癒しはなかった。我が尾瀬では、「ニッコウキスゲ」が少なくなってしまい、鹿の駆除など懸命に努力していただいている。昨年から少しずつその努力が実りつつある。秋田駒の「ニッコウキスゲ」は、なんといっても鮮やかでみごとであった。秋田駒は鹿がないのだろうか。



車中泊は、各地区の道の駅にお世話になる。周りにはたくさん的人が車中泊をしていて仲間感を感じてしまう。狭い車の中で睡眠は、非常に窮屈ではあるが、何年も経験していくと次第に慣れてきた。夫はでかいびきをかきながら早々に就寝。私は、夫の頭の方に足を向け小さなライトをつけ読書にいそしむ。何とも言えない楽しみがそこにある。しかしながら、我が家家の反省点は食事にある。17時ごろに閉まってしまう道の駅で生ビールとともに夕食をいただくときもあるが、近くに居酒屋はないかと探してしまう。運が良いのか悪いのか、なんだか思い求めていた居酒屋、焼き肉店なるものがあるのだ。そこで、かなりの出費！2学期は食事にかける出費を減らす。

これからも反省を改善しながら今できること今楽しむことを続けていこう。

最後に、素晴らしい県大会でした。そのコンセプトがしっかりと反映されたものになったと思っている。以前南会津から発信しようと試みていたあの頃を思い出した。南会津から発信できたのではないだろうか。皆様の連携とその見事な働きぶりに乾杯!

会津大会を終えて

大会実行委員会総務 星 裕次郎

3年前、前事務局長の川島敬章先生から仕事を引き継ぐ際「県大会があるんだよねえ」と話がありました。どうにかなるだろうと軽く考え、お世話になった南会津の先生方に少しでもお役に立てれば…と、この役を引き受けたことを思い出します。

いま、こうして第59回福島県公立学校退職校長会会津大会を無事終了することができ、正直ホッとしました。引き継ぎの際に素案はありましたが、どこから手を付ければいいのかさえ、まったくわかりませんでした。そんな折、現支部長の齋藤修一先生から「なるべく簡素化して、スリムに最小限で…」というお話があり、気が少し楽になりました。そして2年前（令和5年8月）の事務局会で実施原案の検討からスタートしたわけです。このときは前年同様250人規模の計画でしたが、既に実行委員は南会津支部員で組織すること、実行委員会は支部総会時に抱き合せで開催し、経費を削減することなどが盛り込まれていました。この案は同年11月に会津4支部の連絡会で協議され、大筋了承されましたが、参加人数の見直し意見が出され、規模を180人に縮小した案を作成することになりました。

新しい年を迎える、令和6年2月には、実行委員への協力依頼を行いましたが、予定していたほぼ全員のみなさんに快く引き受けていただけたので、一安心でした。この年の総会後に第1回実行委員会を開催し、大会概要と役割分担について協議しました。同年8月に県事務局との事前打合せを行い、ようやく大会の全体像が見えるようになったのです。

このとき齋藤支部長から県事務局に「県

大会のレガシーを生み出したい！」という驚きの話が飛び出しました。①日本の教育を自己実現から貢献型（持続可能な、地域を担う教育）へ転換する②環境負荷を極力抑えた大会運営にする③大会宣言を社会に向けたものにするというものでした。とにかく一貫性を持たせるため、「共生と持続可能な社会の実現に向けて貢献するために」というテーマを掲げ、①～③をコンセプトに設定し、その上で具体的な実践内容を検討したわけです。各支部長さんは、年末が押し迫る中、水面下で大会宣言の原案作りを進めておられました。私は座席表、アンケート、タイムテーブル、会場図の作成や大会後援申請等を行いました。今回、県事務局や県内各支部、講演者、体験発表者、御蔵入交流館担当者との連絡がすべてE-mailで出来たので大変助かりました。

いよいよ令和7年を迎え、準備も加速度的に忙しくなっていきました。要項の写真は小林宗一先生からお借りしましたが、いずれも南会津にふさわしい素敵なもので、印刷完成が楽しみとなりました。4月15日に第2回の実行委員会を開き、タイムテーブルとステージ配置を中心に協議を行いました。このとき大会名や国旗、会旗などのステージ背景を大型スクリーンに投影することが確認でき、これでひと山越せたなと思いました。アナウンス原稿も橋成美先生と山本恭士先生のお陰でほぼ完成しました。



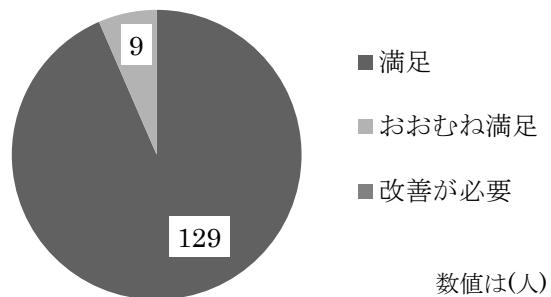
会計担当の大塚聖子先生には、お一人で各支部からの参加費の振込確認、領収書の発行等をそつなく行っていただきました。さらに私は参加者名簿の作成、大会要項原稿のチェック、弁当の発注も済ませ、前日の準備となりましたが、会議室の使用時間をミスし、ホワイエでの作業となりました。しかし、みなさん何一つ文句も言わず、手際よく要項の袋詰めや昼食会場作成、受付準備などの作業を進めていただきました。とてもありがとうございました。

準備万端、当日を迎えたが、「とにかく、接待は私たちに任せて」という星尚子先生の厚い言葉に支えられ、新しく実行委員に加わっていただいた高橋弘之先生、室井辰生先生をはじめ、みなさんが先を見通しながら自分の係を越えて動いていただけたおかげで、私は安心して全体調整とPC操作に集中することが出来ました。この場をお借りし、御蔵入交流館のスタッフのみなさまにも、心から感謝申し上げます。

アンケートの結果を見ても、参加者の満足度は非常に高かったことがわかります。特に脇坂さんの講演では93%が、体験発表では76%が満足したと回答しています。

「講演のお話、会員発表とともに、とても良い話が聞けた。発表の順番も適切」「ねつか社長の講演がすばらしかった。『一人勝ちしない。地域の人と共に』という考えに共感した」「体験発表はテーマを意識した

脇坂さんの講演



もので、例年には持続性のあるもので良かった。今後の参考になるのでは…」といった意見や感想も多数いただきました。

また「南会津地区の皆さまのお心遣いに感謝申し上げます。心に残るすばらしい大会だったと思います」「これまでの準備、大変お疲れ様でした。充実した一日となりました」といった慰労とお褒めの言葉もたくさんいただきましたが、最もうれしかったのは「参加して、退職校長会に入っていて良かったと思いました」「初めての参加でしたが、退職校長会についての理解を深めることができました」という感想でした。大会を開催して本当によかったですと、やり甲斐を逆にいただきました。中には「お題目を掲げるこれまでの大会宣言と、内容は変わっても同じだ」といった厳しいご意見もありましたが「広い会場でゆったりと参加できた」「会場の音響が良かった。お弁当がまた美味しかった」など、気持ちよく過ごしていただけたことは間違ひありません。

大会をとおして私が感じたものは、大会成功の喜びはもちろんですが、南会津支部会員が、お迎えする側としてひとつにまとまることができたと実感できた喜びです。

大会レガシー（団結、底力、熱意）はこの南会津の地で間違いなく生み出されたと思います。齋藤実行委員長さんはじめ、それを支えて下さったスタッフのみなさん、本当にお疲れ様でした。

写真で振り返る会津大会

これまでの大会常識を打ち破る画期的な試みが奏功した大会でした。その一端を写真とともに振り返ります。

前日準備会 きめ細かな準備計画で、少人数でも2時間弱で完了



【準備打合せ】まずは全員で要項の袋詰めからその後は係ごとの準備へ



【昼食会場準備】表示は最小限に 環境に優しい分別は、参加者の意識の高さに期待



【ステージ準備】会場係のナイスチームワークで、当日もスムーズな配置転換が可能に

【接待】利用者の心地よさを考え、配置や動線を熟考



大会当日 早朝から準備、受付、無駄のないスムーズな運営



【駐車場】来賓スペースもコーン表示のみ 誘導なしでも混乱なし

【接待】狭さも工夫で克服



【受付】参加費の事前振り込みで事務が大幅軽減



【文化ホール】各地区の座席割り当てにゆとりを持たせ、会場内案内係も不要に



【ねっかコーナー】売り場の設置も前例打破の一つ 好評で長蛇の列

[事務局より]

祝賀寿

8月1日（金）に95歳の誕生日を迎えた室井強先生宅を訪問させていただきました。先生は下郷町豊成の自宅にお一人で住んでいらっしゃいます。足腰に不安はあるものの、記憶やお話はとてもしっかりとおられました。ときどき娘さんが様子を見にいらっしゃるそうで、町のデイサービスも利用されているようです。斎藤支部長から賀詞の伝達と記念品の贈呈がありました。

先生は昭和24年旭田小学校音金分校助教諭を振り出しに奉職され、通信教育で苦学を重ね日本大学文学部国文学科を卒業、晴れて教諭として旭田小学校、田島町立八総鉱山小学校、朝日村立朝日小学校と勤務、さらに昭和42年には都市派遣で白河一小に勤務され、全国公開授業提供等をされたそうです。その後、南会津教育事務所指導主事を経て伊南小学校長昇任、下郷中学校長を最後に定年退職されました。「環境は人を作り、人は環境を作る」「小さくたつて弱くはないんだ」をモットーに数多くの実績を残してこられました。

退職後は下郷町史の執筆に関わる中で“知られざる郷土の偉人 芳賀竹四郎”を発掘し、歴史春秋出版社から自費出版した

室井 強 先生

というお話を伺うことができました。軍医芳賀竹四郎は下郷町弥五島出身、野兎病の病原体を確定させた業績を持ち、医聖野口英世先生に負けず、すばらしい先生だと評された方でした。

さらに国際交流で福島県ウズベキスタン文化経済交流協会

副会長も務められ、交流訪問にもたびたび参加されています。また自宅を開放し貴重な資料の展示・公開も行ってこられました。ウズベキスタンは中央アジアの国でシルクロードの宝石(サマルカンドブルー)とも称されます。また第二次大戦後、シベリア抑留された日本人が移送され、強制労働を受けた歴史があります。1991年のソ連崩壊によって独立、現在、日本との国交も樹立され、相互に大使館があり、官民両面で交流も盛んに行われています。

このように退職後も精力的に諸活動に取り組まれた先生のお姿は、我々に社会貢献の大切さを、身をもてお示しされたと思います。強先生、これからもどうぞお元気でお過ごし下さい。



[事務局より]

謹んでご冥福をお祈ります

野中 儀一 先生 (南会津町静川) 5月31日逝去 96歳

元田島小学校長、山木屋中、若松六中、檜原小校長も歴任されました。

舟木 武人 先生 (白河市) 7月6日逝去 83歳

元荒海小学校長、田島二小、針生小学校長も歴任されました。

支部定期総会

R7・4・15 (火) 御蔵入交流館



県教育庁南会津教育事務所長佐藤智晃様、南会津郡小中学校長協議会長栗木孝直様にご臨席いただき開催しました。佐藤様からは本県教育の現状や重点施策について、栗木様からは児童生徒数の減少、特別支援教育や若手教員育成など南会津の教育課題について講話をいただきました。

議事では、退職制度の変更に伴う会計内規の改正が提案され承認されました。役員については、会津大会開催の関係から昨年度までとほぼ同じ顔ぶれとなりました。(役員一覧を次ページに掲載)



会津大会第2回実行委員会

定期総会後、会津大会に向けた実行委員会が開かれました。

齋藤修一実行委員長から大会テーマ、コンセプトそして3つの具体的実践を柱とする全体構想の説明があり、総務、会計より大会要項・予算案・詳細な運営計画・会場準備計画等が提案されました。その後、各係の打ち合わせを行いました。県本部や会津他支部など関係機関との打ち合わせを重ね、緻密に練った計画案をまとめた実行委員会事務局のおかげで、実行委員会をたった2回開催しただけで本番に臨むことができました。



[事務局より]

現職・退職校長合同研修会

R7・8・20（水）御蔵入交流館

犯罪心理学の研究者として詐欺被害の防止や減少に尽力されている岩手大学準教授の鈴木 護先生を講師に「あなたも必ずだまされます！」と題し、投資詐欺やロマンス詐欺、警察官を騙る特殊詐欺について、その被害の深刻さや詐欺グループの手口の巧妙さ、被害を最小限にとどめるためのポイントなどを丁寧に教えていただきました。

なぜだまされてしまうのか。詐欺犯は、「あなただけに教える必勝法」「恋愛の主人公に」

「正義感と責任感に訴え」など、人間心理の隙をつく様々なテクニックを駆使してきます。被害は、金銭的なものに止まらず、自尊心が傷つけられ、誰に相談することもできず、人間関係までも崩壊させる深刻な事例が多いということです。「すぐ簡単」「秘密」「特別」「絶対」などは要注意の怪しいキーワードです。

昨年度に続き、オンラインでの講演でしたが、動作環境が良好でしかも時宜を得たテーマでしたので、できるだけ沢山の人に聞いてほしい内容でした。



講演会後は、場所を丸山館に移し、恒例の合同懇親会を開催しました。2学期を間近に控え多忙な時期ながら現職の校長先生方は全員が出席してくださいました。ありがとうございました。お陰様で、和やかな中にも有意義な交流ができました。



令和7、8年度役員

顧問	星 富子	広報部長	星 秀司	理 事	第3方部	橋 成美
	五十嵐利明	クラブ長	星 賢二		第4方部	飯塚 義雄
	小林 宗一					渡部 早苗
支部長	齋藤 修一	理 事	第1方部	室井 永治	庶務	星 裕次郎
副支部長	星 弘明			山本 恭士	会計	大塚 聖子
	玉川 邦夫			大桃 豊	評議員	齋藤 修一
	橋 成美			星 俊夫		星 裕次郎
監事	馬場 永好		第2方部	湯田 恒弥		
	佐藤 誠一			大塚 聖子		
	星 英雄			佐藤 淳一		
				高橋 弘之		

6年間広報部長を務められた田中昭一先生が退任されました。長い間大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

表紙『神楽鈴』に込めて

小林 宗一

作者の思いを作品に表現することは難しい。特に写真では強く感じる。どうすれば自分の思いを表現できるのであろう。

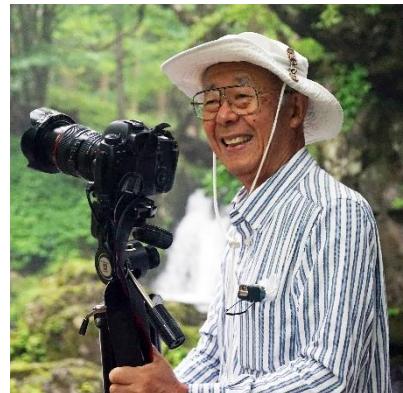
写真家としての私の分野は主に風景写真である。撮影するときはポイントを見つけ構図を絞り、シャッター速度を決め瞬時にシャッターを切る。被写体に良さを感じるからシャッターを切るのだが思いを込めてシャッターを切ることは少ない。

表紙の作品はコラージュ、ファインアートといつても良い。思いを伝えやすい。こんなのは写真ではないという方もおられるがこういうこともできるのである。写真の土台は日光大猷院の石畳である。雨に濡れた石畳の模様に、以前撮影したいろいろな桜を貼り付け一つの絵画のように仕上げていった。石畳には模様がある。その模様に、場所を指定し色や濃度を変えながら桜を貼り付け絵作りをしていくのである。作品への私の思いは、夢であり恋であった。

この作品に対し私の友人がコメントを送ってくれた。「絵の広がりが 平面から立体に立ち上がるようになって 桜の、コラージュの それぞれの部分部分からシャンシャンと巫女舞の鈴の音が聴こえてくるような そうそう、鈴を振るたびに桜が咲いてくるような そんな明るい兆しを感じさせてくれるような」 友人のコメントから「神楽鈴」とタイトルをつけた。

小林宗一氏は、県写真連盟会員、南郷写真倶楽部会長としてご活躍されていらっしゃいます。地元奥会津の自然をこよなく愛し、その素晴らしさを個展や出版、ホームページを通して発信されています。先生の略歴や活躍の様子は、心奪われる写真の数々とともに下記ホームページで紹介されています。ぜひご覧ください。

<http://aizu.stars.ne.jp/> 「奥会津のこころ」



四月の引き継ぎ時に、歴代
広報部長の熱い思いをお聞
きし、身の引き締まる思いで
した。それでも、会長の心強い
後押しと前部長である田中
昭一氏のアドバイス、そして
素晴らしい原稿をお寄せく
ださいた皆様のおかげで第二
十五号を発行することができます。ありがとうございました。ありがとうございます。
今号では、成功裡に終了し
た県大会に関する内容に多
少重心をかけました。大会の
様子やその成果が少しでも
伝われば幸いです。
また、今回の広報用紙は、
売り上げの一部が産地の森
の再生に使われるという環境
保護協賛の紙を使用しまし
た。裏写り等見づらい部分が
あります。ですが、会津大会で掲げ
たテーマに免じてお許しくだ
さい。

編集後記